The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	金鶴泳作品における「民族主義」
Author(s)	李, 丞鎮
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2010, 44, p. 103-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10229
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

金鶴泳作品における「民族主義」

李　　丞　鎭

0. はじめに

金鶴泳における民族性の問題は、その希薄さをしばしば指摘されてきた[1)]。おそらく、彼の作品に顕著に現われる内面凝視の態度が、外部にある在日性や民族性といった世界との積極的な接触を躊躇しているかのような印象を読者に与えるためであろう。しかし、デビュー作の『凍える口』（1966）により、吃音の呪縛から解放されたこの作家にとって、次なる問題として父親や民族のテーマが立ちはだかることになる。在日二世文学において父親の問題は民族というテーマと強く関係して現われるが、その二つのテーマが金鶴泳において並列的に登場するようになったのは、『まなざしの壁』（1969）である。『まなざしの壁』において、在日朝鮮人として内なる差別の意識に気づくことによって、民族というテーマを正面から直視することになる。そして、それは父親というテーマを直視することとほぼ同時に行われた。以後、金鶴泳の作品において民族が中心的な軸をなしているものの多くに父親が一緒に登場する。この二つのテーマは彼にとって錯綜して絡み合っていたため、両者を離して考えることは困難であった。とはいえ、父親の世代とは違う意味での民族の問題が、彼にも大きな悩みとなった。二世として、民族というものをどのように摑むべきかは、金鶴泳にとっても、父親に劣らない問題として機能した。＜在日の苦悩＞といったものに金鶴泳も苦闘していたことは否定できない。が、その苦悩の本質を民族という場所で、正確に言えば二世的な民族という場所で考え

ようとしたので、金鶴泳は、むしろ、常に民族のテーマに深く関わった作品を描き続けた、と筆者は考える。

本稿では、金鶴泳における民族のテーマがどのように変容して行ったのかを中心にみていく。そうすることにより、金鶴泳作品における民族のテーマの独自性を提示したい。

1.「不安」の正体

李恢成や高史明のような在日二世作家の作品における同化少年の記憶は、逆説的に彼らの作品の在日というテーマを絶えず想起させる。彼らの作品における同化少年の姿は、その時代を生きた在日の子供たちの状況が鮮明に反映されている。それゆえに、一つの幼年期の記憶が、その時代における在日の子供の典型的な原風景としての意味を拡大し、その中で、民族的な要素に富んだ作品世界が確保できるのである。また、同化少年としての記憶を、丸ごと否定すべきものとして固定することで、現在の自分を過去とは異なる場所へ押し上げることも可能となる。

それに比べて、金鶴泳が描く民族問題は、同世代の李恢成などが描くそれより、具体的かつ現実的な場面から現われる。『凍える口』に登場する主人公も、さりげなく在日の青年が感じてしまう民族の感触を作品の中で多く描いているが、それは例えば次のような場面である。

> さっきもいったように、朝鮮関係の本を読むことは、ぼくにはひどく憂鬱なことだ。それは、そのような本を読むことによって、朝鮮人の舐めさせられてきた悲惨が、どう顔をそむけようもなく存在してきたし、いまなお存在していることを知って気が重くなるからばかりでなく、日本一般に対する憎悪の心をも刺戟されるからである。憎悪の心を刺戟されることによって、自分がこれまで深くなじんできた周囲

とのあいだに、突然に異邦人としての断層が意識されるからである。[2)]

金鶴泳の描く民族とは、決して、眩しい理想としては現われない。彼にとっては、やっかいなことに、その概念が絶えず日本を相対化する構図の中で具体化される。多くの場合、在日二世の青年たちにとって民族は、自分の現在を確証してくれるものとして機能する。が、問題は民族が具体的にどのようなものかを見つける前に、日本という現実に対抗するための手段として現われることである。民族意識が現実上の差別の構造に対抗する手段として規定されるとき、直ちに在日をめぐる政治の枠組みの中に青年を押入れることになる。金鶴泳が警戒し、獲得することに躊躇する民族性の姿がまさしくそこにある。それは、自分が納得できる民族性といったものを発見しないまま、民族意識が現実上の問題を打開する方法としてとりあえず機能してしまうことに対する違和感である。

金鶴泳のこのような姿勢はどこに起因するのであろうか。

まず、挙げられるのはやはり父親の存在である。金鶴泳作品の父親は政治意識を強要する者として、ここに登場するのである。

「ゆうべのことにしても、俺にはおやじの気持ちがわかる気がするんだよ。おやじのような植民地時代を生きてきた人間にとっては、国が独立したというだけで、これはもうずいぶんありがたいことなのかも知れない。個人崇拝がどうのこうのというのは、ぜいたくな不満でしかないのかも知れない。じっさい、自分の国が植民地であるのと独立国であるのとでは、大ちがいだからね（……）一概に個人崇拝だのなんのといって批判することもできない気がしてくる。批判するだけだったら、たやすいことだからね。俺は自分をまちがっているとは思わない。しかし、現実的ではないのかも知れない」[3)]

「政治意識」＝「民族意識」という等式が成立するとき、それは直ちにナショナル・アイデンティティの強制に繋がることになる。しかも、戦後分断された祖国はそれぞれ、独裁政権の姿をしており、その政治に加担するということは、独裁政権の頂点にある一人の権力者を支持することであった。無論、後に北朝鮮の個人崇拝は批判されることとなり、韓国における非民主的な状況も打開すべき現実として認識されるのだが、少なくとも一世の多くにとって国が独裁体制を取っているということはそれほど問題ではなかったのであろう。国なき流浪民にとって帰属する場所ができたということのみが重要であったのである。当然、一世にとって組織とはそのまま祖国を意味していた[4)]。そして、多くの一世が祖国として組織の思想を子供たちに教えることで、民族の本質を教えられると信じていた。子供たちもまた、その世界から自ずと民族意識を獲得するようになり、そういう過程において多くの子供たちは政治の思想と民族意識とをほぼ同じ位相で考えるようになる傾向があった。

子供たちは、親から届くメッセージに反目したり同調したりしながら、知らぬ間に民族意識に目覚めていくことになるのである。民族の実体とはともかく、大きな物語としての民族は確保できるのである。政治的なスローガンを叫ぶ自分こそ、民族の実体に近づいており、しかもそのことによって、日本社会において在日が抱える矛盾を一気に吹き飛ばしてくれる原理を発見できるのである。

しかし、金鶴泳にとって、父親は自分が「あるがままの形では存在することを拒否され」ることを絶えず植え付け、「ひどく孤独な、不安な気持ちにさ」せた張本人である。そして、現在なお彼を不安にさせる存在だ。そのような父親のメッセージに同調することは、金鶴泳にとってどれほど胡散臭く思われたかは想像に難くない。父親が発する政治的な言葉は、自分が拒否してきた記憶を絶えず想起させることであり、まずそれを否定し

ようとする心理状態に陥ることになる。問題は、この拒否が、金鶴泳を結果的に民族の議論から離れさせることになることだ。金鶴泳にとっての焦燥感とは、父親のメッセージがもつ胡散臭いなにかを拒むということではない。むしろ、それを拒否することで、在日社会を成している世界の範形から自分だけが外れていることへの不安である。

> たしかにそれにちがいなかった。僕はよくわからない。朝鮮のことも日本のことも、そして自分のことすらよくわからない。
> (……) 祖国の一大事を、それ相当の重みを以て受け止められないでいる、そんな自分に対する焦燥に悩まされていたのだった。[5)]

金鶴泳も、政治意識の強いそのような議論の場に対する憧れを常にもっていた。それは、そこに民族意識をめぐる真実があるからではなく、その真実を摑もうと具体的に行動している姿に魅了された側面が大きい。自分もそのように、確固たる信念をもって向かうべき場所があれば、という憧憬である。『凍える口』以後、多くの作品において、朝鮮総連系の人や民団系の人との関わりを描きながら、常に彼らとは離れたところに位置している主人公の姿は、彼のそのような心境を現している。絶えず、その場所に属することを志向していたにも関わらず、そのような世界を拒否する自分を同時に発見するのである。

2. 狭間の人間意識

金鶴泳にとっての民族意識とは、決して同時代の政治的な場所から得られる性質のものではなかった。しかし、それは頑なにその場所への加担を拒否したことを意味するものではない。父親の発するメッセージに拒否反応を覚えながらも『凍える口』の金文其のような政治的な人物との関わり

を作品で繰り返し描いているのは、政治や「イデオロギー」の世界に拒否反応を覚えながらも、完全にそれを拒否することには不安を覚えるという彼の感情に起因している。しかしながら、初期作品における彼の問題意識はやはり個人的な悩みに集中している。政治的な場を絶えず気にかけながらも、まずは個の悩みにその焦点を合わせた。

> 「そう―たいへんねえ」と言った。なにがたいへんなのかわからなかった。朝鮮人であることがたいへんなのだろうか？もしそうだとしたら、日本人はたいへんではないのか？人間であることが、そもそもたいへんなのではないのか？……[6)]

竹田青嗣は「なによりもまず自分の＜内面＞が存在するという自意識からは、属すべきものとしての＜社会＞や＜国家＞は大なり小なり非本質的なものとして表象される」と述べているが[7)]、＜内面＞に中心をおくとき、日本・朝鮮、日本社会・在日社会といった区別がそれほど重要ではなくなってくる。『凍える口』執筆の時、彼が絶えず模索したのは、内面の原理ともいえる人間の普遍的な感情であった。竹田氏の見解は、このような彼の内面の原理が、もはや固定化してしまい、社会や国家といったものが内面の原理を説明してくれるものにならず、むしろ出来上がった金鶴泳の世界像を脅かすものになってしまった、というものである。しかし、金鶴泳の自意識に関して「なによりまず自分の＜内面＞が存在する」という竹田の指摘に基本的には同意できても、ゆえに彼が外界を自分にとって「非本質的な」ものとして最後まで認識していたとは考えられない。金鶴泳の文学のそもそものはじまりが吃音によって欠落してしまった言語行為を埋める手段を模索してのものであったとすれば、それは外界との接触を前提とするからである。竹田のいう「非本質的な」ものとの接触は、既に金鶴

泳の文学にあっては、その始まりから予期されていた。

そして、先にも述べたように『凍える口』をもって模索した自己表現は結果的に吃音からの解放をもたらす。個の問題を描く行為により、外界との通路が確保されるようになった。つまり、竹田の言う「非本質的な」ものとの通路ができることになるのである。『凍える口』以後、この作家がその視線を次第に外界に向けるようになっていくのはむしろ自然であり、その世界を成しているのはやはり偏見のせめぎ合う場所であった。

それは、例えば次のような場面であった。

> 「帰れ。朝鮮人はさっさと朝鮮に帰れ」
> と酔った眼をテレビに向けながら独話し、彼はその言葉に言いようのない怒りと悲しみとを覚えながら、同時にそれが自分に向って言われたそれのように、胸を刺され、心を貫かれる。しかも彼は労務者に抗議の言葉を吐くでもなく、労務者と同じように日本人面して、生気のないうつろな眼をテレビの帰還船の映像に向けている。日本人にもつけず、手を振りながら帰還船に乗り込んでいく民族意識あふれたテレビの画面の朝鮮人にもつけず、その中間に遊離し、漂い、さまよっている自分を感じながら。[8)]

世界はまさしく民族をめぐる対立や葛藤として彼に迫ってくる。しかしながら、金鶴泳作品の主人公たちは政治には走らない。『緩衝溶液』(1967)、『遊離層』(1968)、『弾性限界』(1969) などで少しずつ外界との接点を模索していたのは、あくまでも政治意識からは距離をおいた、民族意識の模索であったといえるだろう。しかし、その彼の前に広がるのは、在日を取り巻く冷たい現状であった。

「金嬉老」は、寿永にとって、「朝鮮人」と同意語だった。寿永はそこに、関東大震災に数千人の朝鮮人を虐殺した、あのまなざしが、今日の日本人の中にもまだ脈々と生き続けているのを感じ、思わず戦慄するような気持ちだった―。[9)]

金嬉老（キムヒロ）事件[10)]は、金鶴泳が『弾性限界』を執筆していた頃に、時を同じくして起きた事件である。彼が上記引用部分において感じる「戦慄」とは、目を逸らしてきた日本社会のまなざしに自ら触れたときの実感である。

あのまなざしを正当に受けとめ得ていたわけではない自分、それどころか、当の自分の中にあのまなざしを持っている自分が、なぜそのようなことをいえたのか。[11)]

日本社会のまなざしから自由な場所に金鶴泳が安住することはまず不可能である。在日朝鮮人は、程度の差はあれど、常に何らかの暴力的なまなざしにさらされている。それに対応する道はその暴力的なまなざしを正面から受け留めるか、そこから目を逸らすかの二つしかない。在日の誰もがこの二者択一を彷徨しながら日本社会との距離を測ることになる。が、金鶴泳が金嬉老事件を通じて衝撃を受けたのは、その事件の背後にあるまなざしが予想以上に自分の世界と関わっていたという自覚に他ならない。

そして、縮まる可能性のない距離の発見は、結局自分が戻るところは民族にしかないことを悟らせてくれることになる。問題は、先にも述べたように、当時の在日社会における民族の概念は閉塞した政治の場所でしか獲得できず、分割されている二つの組織のどちらかを選ぶことでしか実感できないように思われていたことである。つまり、金嬉老事件に触発されて、

在日の内部に目を向けても、そこに待ち受けているのは不透明で、どこか胡散臭い世界であったのである。しかしながら、日本との距離を縮める可能性が見えない中、彼が向うことになるのは、その胡散臭い「政治」の世界であり、その世界への参加を画る上で父親を見直し、現在の自分を見直す作業を始める。

3.『錯迷』一負の中間者

先に見てきたように金鶴泳作品における大きな転換は金嬉老事件を重要な題材として描いた『まなざしの壁』(1969)において行われた。この時点から本格的に、自分の立ち位置に関する彼の悩みに、外部の世界の仕組みが重要な要因として認識されることになる。無論、中間者としての自意識は、『凍える口』以後の彼の作品の中心的な問題意識であったのだが、金嬉老事件のような具体的な事件による覚醒により、自分の中の内なる差別意識を気づかされることになる。

山崎正純は、『まなざしの壁』を論じて、「<在日>二世の、朝鮮と日本のあいまいな二重基盤を、欺瞞や詐称と見なして言語化を避けるのではなく、そこにこそ主体の根拠を置いて、「国家、あるいは民族、あるいは人間というものについて、より深く考え」る思考の場としていこうというのである」と述べているが[12]、単なる強いられた立場のみではなく、自分の中で再生産されてしまうような中間者意識の本質を金鶴泳は注目しはじめた。『まなざしの壁』において、父親のテーマと民族のテーマが並列的に登場することや、中間者としての自分の立場が同時に扱われるようになったのは、このような背景ゆえのことであろう。日本という世界に決して入ることのできない自分の発見は、必然的に在日である自分の根拠になる「父親のいる家」を見直すことに繋がった。

私は私の家の暗さを思うとき、そしてその暗さをどうすることもできぬ自分の非力さを思うとき、自分のいっさいの営為が無意味なものに思われてならないのである。真に私に必要なもの、それは大学で化学を学ぶことではなかった。むしろ暗い家をどうにかすることであった。暗い家が暗い家のままであるかぎり、私の「心の飢」、心の不安は、決して消えることがないに違いないのである。[13)]

『錯迷』は、大学の教壇に立っている主人公が大学時代の友人、鄭容慎からの電話をきっかけに、その友人が大学時代に書いたエッセイを思い出すことからはじまる。鄭容慎は、同じく化学を勉強していた友人であるが、彼のエッセイの中で書かれていた「心の飢」という言葉に、かつて主人公は異様に共感していた。現在、鄭容慎は民団関係の仕事に携っており、祖国の政治的な状況に在日として積極的に意見を言っていこうという趣旨の活動をしている。久しぶりに再会した彼に、昔の「心の飢」の痕跡はほとんど見当たらなかった。

しかし、鄭容慎とは違って、主人公の私は、現在までその「心の飢」から逃れることのできないまま生きている。鄭容慎が「心の飢」から逃れることができたのは、民族のためであろうと主人公は推測する。それに対して、自分は、相変わらずその「飢」に囚われたままである。

鄭容慎と再会して感じた、主人公の感想は、煎じ詰めれば上記のようなものだ。鄭容慎は、民団に属し民族問題に具体的に関わることにより、中間者であった昔から逃れることができたのだろうと、主人公は見ている。『錯迷』の主人公は、自分がまだ中間者に留まらざるを得ない理由を明確に認識している。金嬉老事件に触発され、在日としての自覚に立ち戻るとき、主人公には、父親との対面が待っている。父親との二度の衝突のエピソードがこのような民族のテーマと同時に登場するのは、やはり避けて通

ることのできない通路のようなものとして父親が存在しているためなのである。

> (……) 私にとって大衆とは父のことにほかならなかった。私にとって、父はいわば大衆の中の大衆であり、「愚かな大衆」とは「愚かな父」の謂いにほかならなかった。そして、いまもって私は、相変わらずわが家を暗いものにしてやまない父をどうしてよいかわからないのである。父をどうしてよいかわからない私は、したがって、大衆をどうしてよいかもわからない。＜俺はどうしたって＞と私は微かに胸が疼くのを感じながら心に呟いた。[14)]

『凍える口』では、主人公が政治に傾倒している在日の青年に会う場面で、「政治的な人間がきた」と拒否しているが、『錯迷』の主人公は鄭容慎との再会でそれとは反対の反応を見せており、それは金鶴泳の態度の変化を表している。政治の問題にもう少し積極的になるべきであるという自省が、彼の中に起きていることを意味する。しかし、その鍵となる父親は相変わらずどうしようもない存在のままである。自分が敢えて拒否してきた父親と対峙しようとするが、やはりどう処理することもできずに行き詰ってしまう。民族という問題を、父親という通路を通して処理しない限り、何もできないという前提が彼の中に既に出来上がってしまう。鄭容慎に対する憧憬は、それが正しいかどうかはともなく、自分も政治的な道を歩んでみたいという欲望である。それを遮る存在として、父親は相変わらず強力な存在感を維持している。そして、これは結果的に、金鶴泳を最後まで政治意識の世界から隔離する要因にもなる。「父を乗り越えることもできず、父から逃れ切ることも」できない状況に気付き、再び民族問題の糸口さえ見えない場所に戻されるのである。その間も世界は激しく揺れ動いて

おり、その世界に参加できずにいる焦燥感が、彼の民族に対する一つの真実として確定していく。それはまさしく、近づくことは出来ないものの自分の現在に重要な意味をもつという、志向すべき虚像としての祖国であった。

> だが、自分の中に目を向けるにつれ、彼は、社会主義に対する自分の感情が、単に好感だけであって、それによって自分の生活、行動を律するところの、自分の内からなる本当の思想ではないということを感じないわけにはいかなかった。朝鮮人らしい朝鮮人ともいえず、またコミュニストなどでは決してない自分が、たとえば「南朝鮮の革命」だの、「北朝鮮における社会主義建設」だのといってもむなしい空論でしかなかった。[15)]

主人公にいったんできてしまった祖国との距離は、どうしても縮めることができないまま、最後まで続いた。金鶴泳は統一新聞（民団系の新聞）で働いており、韓国籍に変えたのは、1972年であった。ちょうど、『錯迷』が書かれた年に、金鶴泳は朝鮮籍から韓国籍への変更を決め、手続きをした。それは、彼なりの民族への接近の試みであったように思われる。しかし、『夏の亀裂』（1974）における、親子の思想の対立が向かう結論は、縮められない亀裂だけを主人公に残すこととなる。『錯迷』の場所から一歩も進んでいない場所に主人公は相変わらず立っているのである。そしてそれは結果的に金鶴泳作品における独自な民族の描写に繋がった、といえよう。黒古一夫は、「作者金鶴泳の分身と言っていい主人公＝語り手があくまでも中立的（客観的）な立場に立っているということである。これは、金鶴泳が「政治」に対して慎重であったためなのか、それとも警戒心を持っていた結果なのかは不明だが、「政治」に対して一定の距離感を持ってい

たということは、逆にそれだけ「内面」は「政治」によって傷ついていたことを意味する。その点で、金達寿をはじめとする当時の在日朝鮮人・韓国人作家たちの多くが旗幟を鮮明にすることによって自らの文学を形成していたことを考えると、金鶴泳の存在は独特なものであった」と述べている[16)]。が、金鶴泳が政治により傷ついたことは、おそらくそれほど意味を持たない。むしろ、政治の入り口としての父親をどう処理するか迷う間に、その道へ進むきっかけも方法も見失ってしまったという意味が大きかっただろう。しかし結果として、金鶴泳作品は政治意識＝民族意識と思われた時代において、大きな問いを投げかけていたこととなる。政治が崩れていくにつれて、そして、後の世代において政治意識に対する疑問が台頭するにつれて、それとは離れて在日の民族というテーマが登場することとなる。

4. 結語

本稿では、金鶴泳における民族の問題に焦点を当てて論じてきた。

戦後、政治意識と民族意識が等しいものとして考えられていた時期において、金鶴泳の主人公がひたすら感じていることは、政治意識を背景とした民族意識に対する疑問であった。自分にとってもっとも理不尽な存在である父親から発せられる政治意識は、胡散臭いものでしかなく、結果的に彼を同世代の政治的な共同意識から隔離させてしまう。当時の青年たちにとって、二つの組織に区別されている在日社会の政治的な論議に参与することは、それだけでも大きな意味をもった。民族とは何ものかという問いとは別に、政治意識としての民族意識の獲得の場にいるだけで、アイデンティティの揺れから逃れることができたからである。金鶴泳が感じる不安の正体は、その政治に参与できないことに起因する。周りのだれもが傾倒している民族性へ向かうことのできない自分の状態が、彼を不安にする。

それは、父親という存在から、外界への出口を模索する姿勢を、金鶴泳の主人公が崩していなかったことに起因する。そして、戸惑っている間、政治意識としての民族の獲得は、ますます遠くなってしまう。その結果、金鶴泳にとっての民族は、幻想のような実感の伴わないものとして、最後まで描かれる。彼にとって民族は正体の見えないものであった。その正体を発見することもできず、見据えることも諦めず、焦燥の感情の中で立ち続けている姿にこそ、金鶴泳の「民族主義」の本質があるといえるだろう。

注

1）林浩治は『在日朝鮮人日本語文学論』（新幹社、1991、p. 199）で、「李恢成が血の意識の前提の上に、政治的に＜民族意識＞を育てあげていき、祖国の統一へと向かう創造的で建設的な立場をとったのと対象的に、金鶴泳は＜在日の苦悩＞そのものを反映した」と述べている。多くの論者が、金鶴泳に対して同様の評価を下している。

2）金鶴泳『凍える口』（『金鶴泳作品集』クレイン、2004、p. 38）

3）金鶴泳『遊離層』（『金鶴泳作品集Ⅱ』クレイン、2006、p. 170）

4）「在日一世の「体でぶつかる」というたくましいエネルギーは、例外なしに民族愛、同胞愛にもえて」いて「そうした一世の生き方は、なによりも日本における「祖国」というべき民族団体の組織化と、そのもっとも重要な事業である民族学校の建設に実現されてい」たと述べている。（尹健次『きみたちと朝鮮』岩波書店、1991、p. 167）

5）金鶴泳『緩衝溶液』（『金鶴泳作品集Ⅱ』クレイン、2006、p. 88）

6）金鶴泳前掲書、p. 25

7）竹田青嗣『＜在日＞という根拠』（国文社、1983、p. 163）

8）金鶴泳『遊離層』（『金鶴泳作品集Ⅱ』クレイン、2006、pp. 194 − 195）

9）金鶴泳『まなざしの壁』（『金鶴泳作品集Ⅱ』クレイン、2006、pp. 291 − 292）

10）「金嬉老（キムヒロ）事件―元ブローカーの在日朝鮮人・金嬉老が一九六八年二月に借金のもつれから暴力団員二人を射殺後逃走、翌日寸又挟温泉の旅館に宿泊客ら十人を人質にとってたてこもり、自分の死と引き換えに（ママ）、幼少の頃から差別を受けた抑圧者として日本社会と国家を告発した。三年余の法廷闘争の後、七五年、最高裁で無期懲役確定」（ 姜尙中『在日』（講談社、

2004、p. 74）による。

11）金鶴泳前掲書、p. 290

12）山崎正純『戦後＜在日＞文学論－アジア論批評の射程』（洋々社、2003、p. 45）

13）金鶴泳『錯迷』（『金鶴泳作品集Ⅱ』クレイン、2006、p. 309）

14）金鶴泳前掲書、p. 329

15）金鶴泳『夏の亀裂』（『金鶴泳作品集』クレイン、2004、p. 249）

16）黒古一夫「「北」と「南」の狭間で－金鶴泳の口を凍えさせたもの」（『在日文学全集第6巻』勉誠出版、2006、p. 440）

（大学院博士後期課程学生）

要　旨

金鶴泳作品における「民族主義」

李　丞鎭

김학영은 재일 2 세대 문학세대에 속하는 작가로서, 말더듬이로 상징되는 내면지향적인 작품세계를 독특한 감성으로 그려낸 작가다. 같은 2 세대 문학세대에 속하는 이회성이나 고사명과 같은 작가들의 작품에서 주인공들이 자기정체성을 형성하는 과정에 민족이라는 주제는 절대적인 요소 중의 하나로서 기능하고 있다. 그에 비해 김학영 작품에서는 우선 세계와 주인공 자신과의 거리가 주요한 주제로 제시되고, 그 안에서 자기 정체성의 모색을 중요시하고 있는 이유로 인해 민족성의 희소성이 주로 지적되어왔다. 하지만 김학영의 데뷔작부터 말기의 작품까지를 폭 넓게 살펴보면 민족이란 테마가 오히려 작가의 주인공들의 통해서 느리지만 일관되게 중요한 요소로서 부상하고 있는 것을 알 수 있다. 그 논거로서 본고에서는 김학영이 작품활동을 왕성히 전해하고 있던 시점의 민족주의가 분단된 조국의 현실을 반영한 정치의식과 거의 같은 지평에서 다루어진 점을 들었다. 김학영 초기 작품의 정치의식에 대한 거부는 김학영 작품의 또 하나의 큰 주제인 아버지와의 특수한 관계 속에서 어쩔 수 없이 놓여진 상황을 감안하여 이해할 수 있다. 문제는 동세대의 정치의식으로서의 민족성 공유의 장에 참여하지 못한 것에 기인한 김학영의 초조함과 폐색감이라고 할 수 있다. 그런 의미에서 김학영 작품의 단절된 의식세계는 민족성과 결정적으로 연결되어 있고, 오히려 김학영은 마지막까지 정치의식과는 다른 의미에서의 민족의 모습을 지향하고 있는 점에서, 3 세 이후의 세대의 민족성의 문제를 선구적으로 그리고 있다고 말할 수 있으며 바로 거기에 작가의 민족주의의 본질이 있다고 할 수 있다

キーワード：金鶴泳, 民族主義, 父子葛藤